

Barnaby Rudge 論

—ブルジョア階級の擁護者ディケンズ—

鈴木良平

1. ゴードン暴動

「バーナビー・ラッジ」は、チャーチズム運動の昂揚などによって社会的関心を目覚めさせられた Dickens が、ピカレスク・ノヴェルの形式を捨てて、社会の全体像を一つのストーリー中心に描こうとした初期から中期にかけての作品である。「バーナビー・ラッジ」とは主人公の白痴の青年とその同姓同名の父親の名前であるが、副題“A Tale of the Riots of 'Eighty”が示すように、1780年の The Gordon Riots 別名 Non-Popery Riots を題材にしたものであるので、まずそのゴードン暴動の概略から話を始めることにしたい。

「1780年6月2日に、セント・ジョージズ・フィールズからウェストミンスターまで行進した6万人は、当時施行されてから2年経っていた、ローマ・カトリック教徒救済法の廃止を請願していた。……ジョージ三世は、勿論、ローマ・カトリック教徒救済法と同様、その議案を嫌った。一方、ローマ・カトリック教徒救済法廃止の請願の指導者ジョージ・ゴードン卿は、シティーを代表する下院議員でウィルクスの手先、市参事会員フレデリック・ブルに助けられていた。シティーはそのような暴動を起こすのに熟達していた。例えば、ウィルクスのための暴動もその一つである。そして、1753年のユダヤ人婦化法反対の暴動の場合のように、暴動に、平然として宗教的色彩さえ施した。暴徒は…ブル及びほかのシティーの人間から指令を受けたことには疑問の余地がない。というのも、シティーが当時最も力の弱まっていた政府を倒して、対米戦争も終わらせようと望んだのは確かなのだから。……

その夜暴徒はいくつかの外国大使館の礼拝堂を荒らし、……引き続き数晩、暴徒の攻撃はローマ・カトリック教徒の家から大臣、治安判事、裁判官、司教の家に及んでいった。その後は、裁判所、監獄、公共の建物に及んでいった。……

6月6日、暴徒はニューゲイト監獄を焼打ちした。6月7日には、シティーの各所に火の手があがり、イングランド銀行が襲撃された。暴徒は、やり過ぎてしまったのである。その日、反対党に迫られ、ジョージ三世は軍事布告を発した。軍隊が、3つの橋と主要道路と建物を確保するために出動した。ウィルクスは、今や市民軍とともに発砲していたし、他のシティーの人間も、市民としての義務の遂行に熱心になった。暴徒は、6月8日に再びイングランド銀行を襲ったが、追い払われてしまった。翌日の夜までには、ロンドンはかなり平静になった。そして、ロンドンが平静に戻ると、他の都市も平静になった。少なくとも300人の暴徒が殺され、更に多くの者が負傷した。……実際に絞首刑になったのは21人だけだった。指導者たちが捕われなかったのは、きわめて明白だった。捕われた大部分の者は、ほんの子供に過ぎなかったのである¹⁾。」

長すぎた引用になったが、18世紀後半から19世紀にかけては本当に革命の時代であった。産業革命、アメリカの独立戦争、フランス革命と3つ並べただけでも、いかに大変な時代だったかが分かるであろう。英国だけに話を限っても、人口の増大（2倍化）、新しい資源の開発（鉄、石炭の200倍化等）、生産手段の発達（相次ぐ紡績機などの発明）という3大要素——すなわち、労働力、労働対象、労働手段——の大変化が、第2次農業革命と結びついて英国の産業革命——近代的工業資本主義——へと導いた。そのような経済的変革にもなって、上部構造ともいうべき社会的・政治的変動も生じたことは言うまでもない。様々な労働問題の発生、文化・教育・ジャーナリズムの発達、メソジストによる宗教の刷新、自治権の拡大、選挙法の改正、等々によって従来の「アンシャン・レジーム」は崩壊せざるをえなかったのである。

たとえば選挙法を例にとってみても、従来の選挙法では選挙権を所有するのは、ロンドン市民800万人のうち16万人という具合に国民の50分の1であっ

たし、しかも選出される議員は「バーナビー・ラッジ」の登場人物サー・ジョン・チェスターのように、ポケット議員選挙区と称せられる、地方貴族の支配する選挙区からの実質上の任命によるものが多かっただけに、選挙における民意の反映などは最初から望むべくもなかった。

しかしながら、18世紀後半から変動が生じ、改革が行なわれてブルジョアジーは質的転換をなしとげ、ジェントリー階級は消滅し産業資本家にとって代られたのである。18世紀の秩序と調和を重んじる理性信奉の古典主義的時代はここに終焉を告げたのであった²⁹。

といっても、このような変革がすべてスムーズに行なわれたわけではない。18世紀後半は政治的には王権と旧議会とシティを中心とする新興ブルジョアジーとの三つどもえの時代であった。特に、ジョージ三世はハノヴァー家三代目の、英国生まれの国王で王権の強化に努めたので、それだけ他の勢力との摩擦は大きかった。たとえば上記引用文中のウィルクスはブルジョアジーのために言論（新聞）で国王や時の政府を相手に斗った人物で、「ウィルクスと自由」が民衆の間でスローガンとして叫ばれ、ミドルセックス州から5回議員に選ばれ、四度も不法に議会から追放されたけれども、ついにはロンドン市長になった男である³⁰。

ウィルクスが言論においてブルジョアジーのために斗ったといえるならば、それに続くゴードン暴動はゲバルトによる直接行動であり、ニューゲイト監獄の襲撃はフランス革命時における民衆のバステューユ監獄襲撃にも比すべき蜂起ではなかったか？

面白いことに、暴動の際のスローガン“**No Popery!**”（カトリック反対）は、“**No Property!**”（私有財産反対）と紙一重の差であって、“**No Popery!**”は即座に“**No Property!**”に転化しうるものだったのである。たとえば38章で獣の如く粗野な男ヒューは“**No Property!**”と思わず叫んでしまっ、ゴードン卿の秘書から“**No Popery!**”だとたしなめられる場面があるが、その言葉をうけて首切り役人のデニスは「どっちだって同じことだ。……すべてを打倒せよ。」と叫ぶのである⁴¹。

現在では、この暴動はアイルランドからのカトリック系の移民に対する失業中のロンドンの下層階級の反撥が原因らしいとされているが⁹⁾、

「要するに、暴徒として処刑されたのは主として、もっとも弱い者、けちな雑魚、哀れむべき連中だった。このような悲惨を生み出した原因たる宗教的な情熱が、いかにまやかしてあったかを如実に諷刺する事実があった。これらの処刑囚のうちの何人かが、自分たちはカトリック信者だと名乗り、死に際にはカトリックの僧侶に付き添ってもらいたいと願ったのである。」(pp. 492~493)⁹⁾

と小説の中にも書かれているように主義・主張などにかかわらず暴動に参加した民衆が多かったのである。また、

「わたしたちが誤って宗教的な叫び声と呼んでいるものは、宗教を持たない人間によっても、日常の慣例において最もありふれた正邪の原則さえも無視する人間によっても、容易に叫ばれるものであるということ、また、それは狭量と迫害から生まれるものであり、無分別で茫然としてしまうものであり、根深く冷酷なものであるということを、すべての歴史はわたしたちに教えてくれる¹⁰⁾。」

とディケンズ自身がこの小説の「はしがき」の中に書いているように、宗教的装いというものは真の宗教心とはかかわりのないところで利用されることが多いものなのだ。

それにディケンズは1780年のゴードン暴動を単なる歴史的イベントとして眺め、歴史小説として書いたわけではない。Tillotsonの「序文」にも書かれているように¹⁰⁾、選挙法改正(1832年)に満足しなかった労働者階級は新救貧法をめぐる暴動から、普通選挙実施をめざすチャーチズム運動を起し、各地で国民請願がおこなわれ、蜂起が発生した。また、それにとまなり弾圧、検挙、裁判、被告の釈放を求める請願や蜂起、処刑などの様々な混沌とした情勢を目のあたりに見ていたディケンズにとっては、ゴードン暴動は単なる歴史的イベントではなくて、現実の切実に学ぶべき教訓でもあった。

2. 「持てる者」と「持たざる者」

この小説は時間的には1775年と1780年の二つの部分に分かれるが、構成上は3部に分けられる。(原文ではなんの区分もなく、1章から82章の最終章まで続いている。)以下、1章から32章までの1775年の物語の第1部と、33章から74章までの1780年のゴードン暴動を中心とする第2部、それから暴動終結1ヶ月後の75章から最終の82章までの第3部に分けて考えることにする。Angus Wilson もいうように、ディケンズは第1部において権威を確立し、第2部において破壊し、第3部において再び確立した⁹⁾、というのがこの小説の主要なテーマだからである。

物語は1775年3月19日の寒い夜のメイポール亭の場面から始まる。その日の丁度22年前の晩に、ウォーレン屋敷の主人でエマの父親であったルーベン・ヘアデルが何者かによって殺されたのだ。同時に庭師と召使頭のバーナビ・ラッジ(主人公の父親)も行方不明になって、2人とも容疑者と考えられていたが、「何ヶ月かたってラッジの死体が——身につけていた着物と指輪でやっと彼だとわかったほどだが——屋敷内の池の底で見つかった。……これで誰にも庭師こそ犯人にちがいないことがわかった。」(p.16)

ここで第1部の登場人物のグループを図示し、簡単な解説を加えることにする。

- | | |
|------------------------|---|
| (A) メイポール亭……… | { John Willet (頑迷な暴君)
Joe Willet (息子, 20才)…Dolly を愛す
Hugh (馬丁, 獣の如き男) |
| (ロンドンから1マ
イルの田舎にある) | |

メイポール亭は、3月の暗い寒い夜とは対比的に、赤々と暖炉の火のもえている陽気な場所として古き良き英国のエッセンスともいうべき“cheerful domestic fireside”を象徴するが¹⁰⁾、その主人ジョン・ウィレットが頑迷な薄のろな人間として描かれていることから分かるように、彼は田舎の知能も教養もない英国人を代表している¹¹⁾。息子のジョーは鍵屋の娘ドリーを愛しているが、ドリーには冷たくあしらわれ、また、息子ジョーの自由と独立を許さない父親ジョンの虐待に耐えかねて家を飛び出し、兵隊となりアメリカに行く。

- (B) ウォーレン屋敷…… { Geoffrey Haredale
 (同じく田舎, カトリック) { Emma (ヘアデイルの姪)…Edward を愛す

ウォーレン屋敷のエマはエドワード・チェスターを愛しているが、彼女の叔父ヘアデイルとエドワードの父が仇敵の間柄で、そのうえ両家の宗教もカトリックとプロテスタントという具合に相反するので、2人の後見人はともに彼らの結婚を妨げようとする。

- (C) 鍵屋…………… { Gabriel Varden (善良な市民)
 (ロンドン, プロテスタント) { Martha (妻)
 { Dolly (娘)
 { Miggs (小間使)
 { Simon Tappertit (徒弟)…Dolly に片思い

鍵屋の主人ゲイブリエル・ヴァーデンは家庭内の反乱に悩んでいる。妻のマーサは「プロテスタント心得」を常に読みふけりながらも大変なじゃじゃ馬だし、娘のドリーは見栄っばりの気まぐれ女であり、小間使のミグズは更に輪をかけたようなひどい女であり、誰一人として主人の思うがままにならない。徒弟のサイモン・タパーティットは主人の権威を一切認めず、夜中に鍵屋を抜け出て徒弟たちの会合に出かける。彼は横暴な親方たちに復讐することを目的とする秘密結社「徒弟騎士団」の隊長になっている。また、彼はドリーに対して身分ちがいの恋というか片思いの念を抱いている。

- (D) チェスター家…………… { John Chester (冷酷な人間)
 (ロンドン, カトリック) { Edward Chester (息子, 27才)…Emma を愛す

父ジョン・チェスターはウォーレン屋敷のヘアデイルと仇敵でありながら、息子のエドワードはエマと相思相愛の仲にある。しかしエドワードもついに父親に勘当され家を出る。

- (E) ラッジ母子…………… { Mary (未亡人)
 (ロンドンから姿を消す) { Barnaby Rudge (息子, 22才, 白痴)

ラッジ母子は未亡人メアリーの夫がウォーレン屋敷の召使頭だった関係で、今でも当主ヘアデイルから生活費をもらっている。そこへ未亡人メアリーが脅

える追剥男が登場し、その追剥男の正体は誰かというミステリーが第1部全体に漂う。

もう一度くりかえせば、第1部では権威の確立がテーマである。

- (A) メイポール亭ではジョン老人の独裁。(⇒息子ジョーの反抗と家出)
- (B) ウォーレン屋敷の当主ヘアデイルは姪のエマの結婚を妨げる。
- (C) 鍵屋の主人だけが少し権威を疑われるところがある。ゲイブリエルは独裁者ではなく、妻や娘や小間使や徒弟の反乱に悩んでいる。
- (D) ジョン・チェスターは息子エドワードの結婚を妨げる。(⇒エドワードの勘当による家出)
- (E) ラッジ母子の家では息子の反抗はないが、外部からの追剥男の登場によって家庭内の秩序が乱れ、一家はロンドンを去り地方に隠棲する、という形で母親の権威が確立される。

以上のように第1部はゴードン暴動とはまった無関係に、退屈なくらいにゆっくりと物語が進展して行くのだが、それから5年たち第2部になるとゴードン暴動が絡らまりあってがぜん話は急展開し面白くなってゆく。しかし暴動の首謀者ゴードン卿らをメイポール亭に1泊させて、無理に第1部の登場人物と結びつけた感じで、どうも木に竹をついたような不自然な印象は免かれない。

すでに中島河太郎氏が紹介していることだが¹²⁾、エドガー・アラン・ポーはこの不自然さはディケンズが執筆の途中でミステリー小説からゴードン暴動を描くことに主要な関心を移してしまったせいだと主張するのである。ラッジ母子がロンドンから姿を消し、5年後の1780年にゴードン暴動の一部として物語が再開されるのはそのせいだ、ディケンズは最初からプロットを決めていなかったのだ、とポーは言うのである¹³⁾。

勿論、このような見解には反論もあり、わたし自身はすでに書いたようにアンガス・ウィルソンの説く、権威の確立—破壊—再確立というテーマに賛成なのだが、如何にもミステリー小説の始祖としてディケンズをライバル視していたポーらしい意見といえよう。

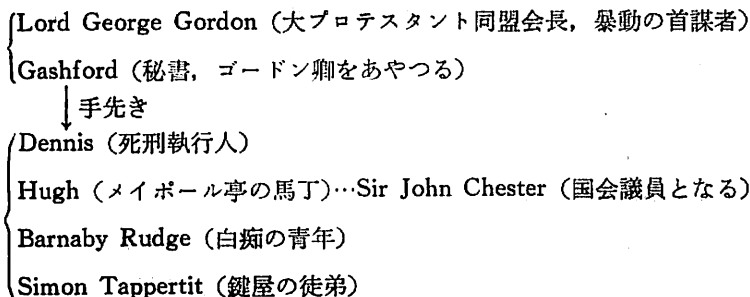
第2部では権威の破壊がテーマである。場面は5年前と同じく、3月19日の

夜のメイポール亭に、殺された召使頭ラッジの幽霊を見た教会の書記が駆けこんでくることから始まる。

メイポール亭に1泊したゴードン卿は、

「ローマ法王とそれに従う下劣な者どもよ、死ぬ。イギリス人が心と手を持っている限り、彼らを罰する刑法は断固として撤廃させぬぞ。」(p. 226) と言って立ち去る。

主要な登場人物を図示すれば、



サー・ジョン・チェスターはヒューを手先きとして利用し、仇敵ヘアディルに復讐しようとする。ガッシュフォードも公衆の面前でヘアディルに侮辱された恨みからウォーレン屋敷を、また徒弟のタパーティットは片想いの対象たるドリーを奪うために鍵屋を、それぞれ私的な意図で焼き打ちするようにヒューやデニスらに命令する。

他方、母親とともに再びロンドンに出てきたラッジは偶然にゴードン卿らと一緒に、ヒューやデニスらと共に国会請願や暴動の先頭に立つ。

このように(A)の馬丁ヒューと(C)の徒弟タパーティットと(E)の息子ラッジがゴードン暴動に加わり主役として活躍することによって、すべての(A)~(E)の家庭の権威が崩壊するのである。つまり、

- (A) メイポール亭の老ジョンは暴徒の襲撃をうけ、権威喪失の象徴であるかのように、ぐるぐる巻きに縛られて手も足も出ない。
- (B) ウォーレン屋敷は暴徒に焼打ちされ、姪のエマは掠奪される。
- (C) 鍵屋も襲撃をうけ、娘のドリーと小間使ミッグズを奪われる。

(E) ラッジ母子の家では、「被害者イコール犯人」というトリックがあばかれ、父親ラッジが二重殺人犯として逮捕されニューゲイト監獄におくられる。母親メアリーは息子ラッジの暴動参加を阻止することができない、という形で権威を喪失する。(父親ラッジは実は主人ルーベン・ヘアデル殺しの犯人だったのである。夫が殺人者であることを知ったショックのせい、妻メアリーが生んだ子供は白痴だった。父親はその後妻子を捨て長らく逐電していたのだが、22年ぶりに追剥男として妻メアリーの前に姿を現わし、彼女をふるえ上らせたのであった。)

やがて暴徒鎮圧に軍隊が出動し、白痴のラッジが逮捕されたことを知るとヒューらは激怒し、ラッジ奪還のためにニューゲイト監獄を襲うことに決め、監獄の鍵をつくった黄金の鍵屋(ここから鍵屋は“Golden Key”と呼ばれるようになる)の主人ゲイブリエルを連れ出して、監獄の正門の鍵を開かせせよとするが、ゲイブリエルは頑として応じない、という恰好いいところを見せる。それで暴徒たちは監獄の正門に火を放つ。その焼打ちの描写はまことに迫力があり素晴らしい。

しかし、ついに暴動も鎮圧され、ゴードン卿はロンドン塔に幽閉され、ラッジとヒューとデニスは逮捕され、タパーティットは負傷する。

第3部は暴動鎮圧から1ヶ月後で、短いが大団円として重要な場面である。そこでは権威の再編成がおこなわれる。完全に権威を喪失する旧世代は(A)メイポール亭、(B)ウォーレン屋敷、(D)チェスター家である。

- (A) メイポール亭のジョン老人は完全に権威を失い、息子ジョーはアメリカの戦争で片腕を失ってはいるが、暴動の最中に鍵屋やヘアデルを助け、今後はエドワード・チェスターの始める事業の使用人になる。
- (B) ウォーレン屋敷のヘアデルは宗旨に反し、姪のエマとプロテスタントのエドワード・チェスター(彼は西インド諸島で金持ちになり、一時帰国中に暴動に出くわし、ジョー・ウィレットと共に鍵屋やヘアデルを救う)との結婚を承諾し、一人淋しく英国を永久に去ろうとするが、英国最後の日に、屋敷の焼け跡で仇敵サー・ジョン・チェスターと出会い、決斗の果てに相手

を殺してしまい海外に逃亡する。

- (D) 第2部でなんの被害も受けずにヒューをあやつり、ヘアデイルに復讐しようとした国会議員サー・ジョンは第3部では完全に権威を喪失する。手先きに使っていた馬丁のヒューが実は彼の私生児であったというどんでん返しが起るし、最後にはヘアデイルとの決斗で命まで失う。息子エドワードは新しい事業をおこしエマと結婚する。(同じく国会議員で暴動の首謀者ゴードン卿も処刑こそされなかったが、ロンドン塔に幽閉され権威を失う。貴族であり支配階級であった彼らはともに権威を失うのである。)

以上のように第1部の旧世代の権威がすべて失墜するなかで、家庭内の反乱に悩んでいた鍵屋の主人ゲイブリエルだけがめでたく権威を確立する。彼と妻マーサとの夫婦仲は円満になり、娘のドリーは虚栄心を失くして片腕となったジョー・ウィレットと結婚し、うるさい小間使のミグズは家から追い出され、親方の支配をくつがえそうとした徒弟のタパーティットは自慢の脚に怪我をし、鍵屋を出て落ちぶれ、罰をうけるかのように身分相応のひどい女と結婚するという具合に、鍵屋のゲイブリエルだけが家庭内の秩序を回復してハビー・エンドで終わっているのである。

新世代では暴動参加の4人組、馬丁ヒューと死刑執行人のデニスが処刑され、徒弟タパーティットは怪我をする。ラッジはお涙頂戴の必要性の故にか、鍵屋らの尽力により直前に処刑を免がれ母親の許に帰って行く。

このように「持てる者」すべてが肯定されているわけではないが、「持たざる者」は全否定なのである。暴動参加の4人組はすべて否定され、それぞれ処罰をうけて姿を消して行く。

第3部の人間関係の推移を改めて図示すれば、次のようになる。

(I) 成功した者

「持てる者」の階層では、

○旧世代の鍵屋夫婦、

○新世代の $\left\{ \begin{array}{l} \text{エドワード・チェスター (新事業主となる)} \\ \parallel \\ \text{エマ (ウォーレン屋敷の姪)} \end{array} \right.$

- その使用人として $\left\{ \begin{array}{l} \text{ジョー・ウィレット} \\ \text{||} \\ \text{ドリー (鍵屋の娘)} \end{array} \right.$

「持たざる者」の階層では成功者なし。

(II) 没落した者

「持てる者」の階層では、

- 旧世代のメイポール亭（田舎の宿屋）のジョン老人
- ウォーレン屋敷（ジェントリー階級）の当主ヘアデル
- サー・ジョン・チェスター（貴族で国会議員）（同じく旧支配階級のゴードン卿）

「持たざる者」の階層では、旧世代のラッジの両親や新世代の暴動4人組は、存在の必要性がないかのように処刑されるか姿を消して、ますます「持たざる者」になっていく。田舎の頑迷な老人や地方のジェントリー階級や、貴族で国会議員の旧支配階級はすべて没落し、「持たざる者」は存在意義を失い、ただひとつブルジョア階級の鍵屋と新世代のエドワード夫妻のみが栄えるのだ。あえて「ブルジョア階級の擁護者ディケンズ」と題するゆえんである。

3. ロマン主義の圧殺者ディケンズ

「ディケンズ読者案内」の著者は、この小説はディケンズが Walter Scott の歴史小説 *The Heart of Midlothian* をまねたものであると言っている。つまり、主人公のバーナビー・ラッジは「ミドロジアン的心臓」に出てくる頭の狂った若い女 Madge Wildfire を白痴の青年に焼き直したものであり、この小説の真の主人公は暴徒であると言っているのだが¹⁴⁾、それも首肯に値する意見だと思われる。「ミドロジアン的心臓」の冒頭にも暴徒らが囚人を奪還するために監獄を襲撃する有名な場面があるし、この「バーナビー・ラッジ」も第2部の生き生きとした暴動の場面の描写でもっているようなものだから。

それに脇役を通して大事件を描くという手法もスコットの歴史小説から学んだものにちがいない。また、スコットの最初の歴史小説“Waverley”の副題が“Tis Sixty Years Since”（今から60年前）と書かれているように、その当時

から60年前の1745年のジャコバイト党の反乱を描いたものなのに対して、この「バーナビー・ラッジ」(1841年に雑誌連載)も「今から60年前」の1780年のゴードン暴動を題材にしているのであるから、小説執筆時のディケンズにスコットの歴史小説を継承する意気込みがあったことは確かであろう。

ところが、A・ウィルソンはこの小説は「想像力対理性」の相争う小説だとみているのである。

「バーナビーがロマン主義の或る面において古い18世紀の秩序を破壊した極端な空想力の自由を代表し、そしてディケンズが幻のような蔭の世界のために真の現実の世界を全面的に捨て去ることへの恐怖をここに表出していることは明らかなように思われる¹⁵⁾。」とのべているからである。A・ウィルソンは徒弟タパーティットの中にロマン主義運動のバイロンの反モラル・反社会的反抗を見¹⁶⁾、白痴のラッジの中にワーズワース的な自然児の反映を見(自然児だからラッジは最後に生命を救われるのだという)¹⁷⁾、更に、ヒューの中に高貴な野蛮人というルソー的な概念を見ている¹⁵⁾。そしてそのようなロマン主義的な想像力の解放をディケンズは恐れたというのである。

とするならば、ディケンズこそ前代のロマン主義の庄殺者であるといえよう¹⁸⁾。想像力を代表するヒュー、デニス、ラッジらは捕えられ処刑され徒弟のタパーティットは怪我をするのに反して、さきにもみたように理性を象徴する鍵屋のみが栄えるのであるから。

つまり、ディケンズは貴族とジェントリーの支配する古き英国の社会も嫌だったけれど、「持たざる者」の反乱も嫌だったのである。この小説の最初の題名が『ゲイブリエル・ヴァーデン、ロンドンの鍵屋』であったように、白痴の青年ラッジは所詮ゴードン暴動の狂言まわしにすぎず、これはどうみても鍵屋の繁栄と、親方の支配をくつがえそうとする徒弟タパーティットの没落とのコントラストを描くことにディケンズの意図があったように思えてならない。

それで以下、徒弟タパーティットがディケンズによって如何にひどい取り扱いを受けているかということ、引用文とともにやや詳しく取り上げたい。

シム(=サイモン・タパーティット)は5フィートくらいの小男で「短い点

では珍品中の珍品ともいえる、膝までの半ズボンをはいた脚のこととなると、彼は自分でうっとりするくらいの、大変な惚れこみようだった。自分の目の及ぼす魔法の力に関しても、何か崇高な思考を漠然と抱いているらしく、……『ひと目ちらりと』眺めれば、もうそれだけで世界でもっとも誇り高き美女といえども、完全に降伏させ跪かせることができるのだ、と豪語していた。』(p.32) そして鍵屋の娘ドリーに身分ちがいの片想いをする。

しかし「彼はいつも、徒弟階級は頭に意気高らかなる首領さえいなければ、すばらしい団体となるのだ」(p.33) と思いこんでいたし、夜になれば鍵屋を抜け出て徒弟騎士団の隊長に変身するのだった。「彼は騎士団の一般目標を述べた。簡単に言うならば、それは横暴なる主人たちに復讐し、……われら古来の権利と休日を回復すること、……首領の命令一下、ロンドン市長、剣持ち、牧師に抵抗し、その職務を妨害すること。」(p.57)

そしてゴードン暴動のどさくさにまぎれて彼は鍵屋のドリーを掠奪し、「ヴァーデンさん、君のごらんになっているこのわたしは徒弟でも、職人でも、奴隷でも、君の父親の暴虐の犠牲者でもなく、偉大なる民衆の指導者、高貴なる連盟の隊長……なのですぞ。……君のしているこのわたしは、君の良人だ。そうとも美しいドリー……サイモン・タパーティットは全身全霊をあげて君のものだ！」(p.379) と叫ぶが、身分ちがいの恋がかなうはずもなく、ドリーはやがてジョーとエドワードによって救い出されてしまう。そのうえディケンズによって「裏切者」という形容詞がつけられるタパーティットは負傷し自慢の脚をつぶされる。最後にはその脚も切断し、がみがみ女と結婚するというふうに終始ドジをふんでしまうのである。

「サイモン・タパーティット氏は病院から監獄に移され、そこから裁判所に送られ、布告によって赦免となった。カッコいい両脚ともに切りとられて木の義足と代り、……何とかびっこをひきひき、もとの主人のところへ助けを求めに行った。鍵屋の忠告と援助によって彼は靴磨き商売を開業し、……あっという間に多くのお得意を作り、……商売が大いに拡大したので、……以前ミルクで骨やぼろを集めて商っていた有名な男の未亡人を妻に迎えた。」(p.520)

時々夫婦げんかをし、彼は妻にお仕置きをくらわせる。「すると奥方は仕返しとして旦那の義足を取り上げてしまうので、彼は近所のいたずら好きの小僧どもの嘲笑のさかになされるのである。」(p. 520)

義足をつけた人間などはディケンズ好みのグロテスク趣味のせいともいえようが、いかにカリカチュアとはいえ、鍵屋の主人の繁栄ぶりと比べてタパーティの取り扱いはどうも不公平なものと思えない。

要するに、ディケンズはゴードン暴動をまじめに正面から描いていないのだ。外面だけを資料をもとに、いかに詳しく描いても、その事件の本質を理解していたとは思えない。その政治的な動機の探究もない。引用する余裕もないが37章の冒頭に書かれているように、ディケンズにとってはゴードン暴動は少数の人間による謀略とか「謎めかすという策略」に帰せられてしまっている。また、ゴードン卿を半狂人として描き、ガッシュフォードという架空の人物を秘書に配することによって、ゴードン卿をでくの坊にし倭小化している。「勝てば官軍」であって、体制側からみればゴードン卿が半狂人にみえるのも当然であろう。

ウォルター・スコットには過去の歴史に対する理性と心情の相剋があった。スコットランドの高地人が滅びゆく現状をやむをえぬもの、否、むしろ歴史の進歩として受け入れる気持があった。と同時に、過去の文化・風習などの失われてゆくことを名残り惜しく思う心情があった。歴史に対する愛と憎しみの併存があった。しかしディケンズにはそのような歴史に対する愛と憎しみの反対感情併存はない。それ故に、歴史小説家としてはディケンズは完全に失格なのである。

4. 修身齊家治国平天下

この小説はディケンズが歴史に託して、古くさい表現でいえば、「修身齊家治国平天下」というモラルを語ったものと思えてならない。父と子の不和が生じていたメイボール亭とチェスター家が滅び、家庭内の反乱を収めた鍵屋がめでたく君臨するというふうに、家庭の乱れが天下の大乱を招いたというのであ

るから。

それを西欧風にいえば、社会は有機的に構成された秩序から成り立っていて、各階層の人間がその職分を忠実に果たすことによって全体が維持されるといふ、「万物の連鎖」(the Chain of Being)や「大宇宙と小宇宙との照応」という世界観になるかと思う。

そのような思想は Shakespeare の頃には常識だったらしく、*Troilus and Cressida* などにもべられている(第一幕三場)。それはあまりにも有名な個所だし、引用するのも気がひけるので省略するが、要するに部将ユリシーズは惑星の間に君臨する太陽を国王になぞらえ、天上界で惑星がよこしまな連合をつくって秩序を乱せば、それに照応して地上の世界でも病気がはびこり、天地異変が起り、反乱が生じ国家の統一が乱れると言って、階層秩序への遵守を強調するのである。

また、ラヴジョイの「存在の大なる連鎖」という本には、「18世紀の初期には道徳律中で一番重要で特徴的なものは、不完徳の勧め——慎重な凡庸さの倫理——とすることができるかも知れない。……人間の義務は自らの分を守り、越えようとしないことであった。ある段階の存在にとっての善とは、その類型に順応することと、その系列の中でのその位置またはその種の位置を決定する形相を表現することであった²⁰⁾。」と書かれている。

このような階層秩序への遵守ないしは大宇宙(国家)と小宇宙(家庭)との照応という観念がディケンズの脳中になければ、ゴードン暴動とは直接関係のない第1部を延々と書くはずがない。さきほど2章で、この小説の第1部と第2部との間にプロットの変更があったと主張するE・A・ポーの説を紹介したが、なんらかの理屈をつけない限り、第1部と第2部との断絶は説明のつけようがない。わたし自身は今のべたように、ディケンズにはシェイクスピアの頃の「存在の鎖」とか「大宇宙と小宇宙との照応」の哲学があったのだと考えている。といってもディケンズとシェイクスピアでは時代が違いうように、2人の大宇宙(国家)についてのイメージもやや異なっているが。

その一例として「バーナビー・ラッジ」とシェイクスピアの民衆の反乱を取

り扱った政治劇 *Coriolanus* とをここで較べてみたい。「コリオレイナス」では第一幕一場で国家が人間の体にたとえられている。これは明らかに Plato の「国家篇」に由来するものだが²¹⁾、シェイクスピアは胃袋をローマの元老院に、その他の体中の器官を平民になぞらえることによって、平民の必要性を説く。しかし、「バーナビー・ラッジ」にはそのような平民の必要性を説くような思想はない。

国家という観念自体がディケンズにはあまりなさそうなのだ。あるとしてもニューゲイト監獄に象徴されるような、否定さるべき国家権力のイメージしかない。それ故にディケンズの国家観を図式化すると、次のようになる。

国 家	{	ニューゲイト監獄 (国家権力のシンボル)……悪
		鍵屋 (中産階級)……善
		「持たざる者」(徒弟, 下層民)……悪

つまり、国家権力のシンボルであるニューゲイト監獄は焼打ちされ、「持たざる者」の反乱は否定され、中産階級の鍵屋のみが肯定される。

プラトンの国家を構成する3階層になぞらえていえば、頭と手足を欠いた胴体だけの国家がディケンズの理想像になってしまう。これは必ずしも国王を必要としない自由放任経済、夜警国家、チープ・ガバメントの時代の世界観の反映であろう。

それに反して「ジョン王」から「リチャード三世」に到る史劇を読んでも分かるように、「シェイクスピアと同じ世代の人たちは、バラ戦争という長い経験から、国王の存在が恒久的な秩序を確保する上で必要であることを痛切に学んだと考えていた。父なる国王という像は、その宗教的な裁可権と、究極的な権威と、道徳的、家族的な意味とによって、強力な貴族どうしの争いや、持てる者と持たざる者との果しない対立などを超えたもの、あらゆる国民の忠誠を得て然るべき共同生活体の象徴だったのである²²⁾。」

それ故にシェイクスピアは胃袋(元老院)や手足(平民)の上に立つ、頭脳ともいふべきコリオレイナスという武将上がりの統治者を造り出さなければならなかったのである。

肯定すべき国家像がないのは、ディケンズひとりだけではない。たとえば彼より10才年少の Matthew Arnold も「我々はすべて情操としての祖国の観念をもってはいるが、我々の殆んど誰も発動する権力としての国家の観念をもっていない²³⁾。」と書いているのであるから、ヴィクトリア朝時代に共通の認識ともいえよう。

すでに一度書いたことだけれど²⁴⁾、要するにディケンズの時代のブルジョアジーは資本主義の発達をもたらしたカルヴィン主義的な禁欲的勤勉さを失い、自己の地位に安住し、退廃と墮落にひんしていたのである。「神と自分の垂直な関係」が「対人関係という水平の関係」を軽くし「地縁血縁による人情のしがらみ」からの個人の解放をもたらし、チューダー絶対王政を打ち倒し（ピューリタン革命）、更には資本主義創生のエートスとなったようなプロテスタンティズムの精神²⁵⁾は、もはやディケンズの小説には感じられない。

鍵屋の妻や小間使が「プロテスタント心得」を常に読みふけていることや、彼女らやタパーティットらの徒弟騎士団がゴードン卿の率いる「大プロテスタント同盟」に僅かばかりの金を献金することなどが嘲笑されていることから分かるように、ディケンズ自身はすでに極端なプロテスタンティズムには反対だったのである²⁶⁾。

更に後年のディケンズはヴィクトリア朝の社会全体が一種の牢獄であり、各自が牢獄に入れられたように連帯性を失った孤独な人間になっていると考え（*Little Dorrit*）、その社会を支える富が人間の排泄物ともいべきごみの山から成り立っているものだ（*Our Mutual Friend*）という認識になっていく。人生観はますます暗くゆうつなものになっていく。しかし彼は決してベシミストにならないで、むしろ厳格なりゴリスト、道徳主義者になって、世の中に警鐘を鳴らし続ける。

けれども社会的秩序に対する関心が増大するにつれて、ディケンズは次第に反動的になり、政治的暴徒や芸術的ボヘミアンや浮浪者、ジブシーなどが不愉快な、うとましいものになっていった。それとともに奇妙にも警官に対する賛美の念が、「警官よ、もっとしっかりせよ！」という激励の気持が強まってい

ったのである²⁷⁾。

つまり、ディケンズは資本主義創生期のプロテスタンティズムを嫌うとともに、「持たざる者」の反抗をも次第に憎むようになる。このように晩年のディケンズは、みずからは貧しい境遇から成り上った身でありながら、肥満化し、爛熟しきったブルジョア社会の擁護者どころか、体现者そのものになっていったのである。

5. 徒弟ウィリアム・ブレイク

William Blake (1757~1827) はディケンズより 55 才年長であり、ディケンズが処女作を書く前に死んでいるので、2 人の間に面識はないであろうし、なら直接の関係はない。しかしディケンズが「バーナビー・ラッジ」の中で、

「昔は徒弟はしばしば休日を権利として獲得し、一般市民の頭を多数叩きこわし、主人に反抗し、それどころか街頭で華々しき殺人さえ行なった。これらの特権は次第次第にわれわれの手から奪われ、これら高邁なる希望はいまや圧倒されている。かかる墮落と圧制が加えられたのは、疑いもなく時代の進歩的精神によるものであって、ゆえにわれらは団結して、われらの存立がかかっている古きよきイギリスの慣習を復活させる変化以外の一切の変化に抵抗せねばならぬ²⁸⁾。」(p. 57)

とカリカチュア的に、否定的に描いた徒弟階層そのものにブレイクが属していたということ、更にこの小説の題材となった1780年のゴードン暴動にブレイク自身が参加していること²⁹⁾、この2点でブレイクとディケンズは間接的にかかり合っている。

しかし、この2点は結局はひとつことに帰着する。つまり、ブレイクが徒弟階層の人間であり、そのような没落階層として「産業革命の時代を辛い気持で生きてきた」(p. 174) ということに。ブレイクは最後の徒弟であった。彼は徒弟として親方の下で7年間の徒弟奉公をしたが、彼自身の許には一人の徒弟もやってこなかった。職人の技術に機械が取って代ってしまったからである。「機械(マシーン)は人間でもなく、芸術作品でもない。それは、人間性と芸

術を破壊する。だから陰謀（マキネーション）というのだ。」(p.179)

このような産業革命の悲惨さの中で、反抗的な労働者は機械を壊した。ブレイクの心の中では、機械は非人間的社会のシンボルとして悪の手先きにみえ、Newtonの力学とLockeの機械論的な社会と同一のものにみえた。ニュートンやロックの中にブレイクは人間を束縛する抽象的で非人間的な社会のシンボルを見たのである。このような非人間的な社会の圧制から人間は解放され、自由に生きなければならない。だからブレイクがアメリカ独立戦争とフランス革命を熱烈に歓迎したことは言うまでもない。

ここで必要最小限度のブレイクの年譜を書くことにする。

ブレイクはロンドンの靴下商人のもとに生まれ、生涯教会に通わずして、真のキリスト教徒であり、また、普通の学校教育もうけなかった。10才でHenry Parsの画塾に通った。しかし職人階層出身のブレイクは経済的な理由から芸術家になることを断念し、彫版画師として身をたてることにした。15才の時James Basireのもとで徒弟となり7年間奉公する。

1783年(26才)、*Poetical Sketches* の出版

1789年(32才)、*Songs of Innocence* の彫版

1790年(33才)、*The Marriage of Heaven and Hell* の彫版

この頃彫版画師としてブレイクが働いていた進歩的な本屋ジョンソン書店での昼食会に出席し、アメリカの独立やフランス革命に生涯を捧げたThomas Paineや無政府主義者として名高いWilliam Godwinや彼の妻で最初のウーマン・リブ論者Mary Wollstonecraftらと知り合いになり、フランス革命に対する認識を深めたといわれている。

1791～2年にトマス・ペインが「人権論」を、1792年にメアリー・ウォルストンクラフトが「女性の権利の擁護」を、1793年にウィリアム・ゴドウィンが「政治的正義」をそれぞれジョンソン書店から出版した。

ブレイク自身もフランス革命に共感し、1791年に同じジョンソン書店から政治的予言書*The French Revolution* を出版しようとして活字まで組まれたが、周囲の政治的状況を考慮してついに出版を断念した。

というのは、1792年に「諸種悪質煽動文書取締勅令」が發布され、イギリスは政治的反動期に入ったからである。酸素の発見で有名な化学者 Priestley の家は暴徒に襲われ、逮捕状の出たトマス・ペインはブレイクの機転で逮捕直前にフランスに亡命した。フランス革命中にフランスでギロチンによって処刑された人間よりも、イギリスの恐怖政治の下で絞首になった人間の方が多いと言われている (p.98) くらいの反動期になっていた。

これ以降ブレイクの書く予言書は過激思想をカモフラージュするためにブレイク独自の神話で包まれ晦渋なものになり、更に後年になってフランス革命の挫折やナポレオンの登場などによって未来への希望を失い、内面の検閲が加わり一層難解なものになっていった。(しかしブレイクは Wordsworth のように決して反動にはならなかった。)

1804年ブレイクはフランス革命を肯定し、反国王的言辞を弄した 廉で不敬罪、反逆罪で告訴され、裁判にかけられた。結局は友人らの尽力により無罪となったが、もし1791年に「フランス革命」というパンフレットが出版されていたならば、それを証拠にブレイクは絞首刑に処されたであろうと言われている。

思わず長くなってしまったが、ブレイクの年譜を延々と書いたのは、18世紀後半から19世紀にかけての時代はディケンズが描くように、必ずしも中産階級の繁栄でめでたく終るようなハッピーな時代ではなかった、ということを示すためでもある。

たとえば *Songs of Experience* の中に “London” という詩があるが、そこには後に T. S. Eliot の *The Waste Land* に引きつがれるような暗いロンドンが描かれている。ロンドンで「わたし」は、出会う人すべての顔の上に「虚弱と苦悩のしるし」を見、すべての人の声の中に「人間の心がつくり出す伽の音」を聞く。(それ故に) 煙突掃除の少年の叫び声に「(邪悪な) 黒ずんだ教会はおびえ」、「不幸な兵士のもたらす嘆息が(反乱を暗示するかの様に) 宮殿の壁に血となって流れ」、真夜中の街頭での「若い娼婦の呪いが、生まれたばかりの赤ん坊の涙を潤らし、婚姻の樞車を疫病で亡す」のだ。

また、若い頃の作品に “Gwin, King of Norway” という政治詩があるが、

そこでは圧制の王に対する反逆が肯定されている。

「この国の貴族たちは、
 飢えた貧乏人を食いものにする。
 彼らは貧乏人の子羊を引き裂き、
 困窮者を彼らの戸口から追い払う。」(2連)

「この国は荒れ果て、我々の妻や
 子供たちはパンを求めて泣き叫んでいる。
 起て！ そして暴君を打倒せよ！
 Gwin 王に思い知らせてやれ！」(3連)

この詩については梅津濟美氏の言葉をそのまま引用したい。

「若きブレイクの王というものに対する態度は、徹底して否定的であり、……扱われている王は何れも圧制者としての王である。……ブレイクのなしている主張は、王と貴族と僧侶の階級が圧制者である、神はかかる圧制を断じて許さず、圧制者を倒すための民衆の反逆を是認する、反逆者こそ愛国者である、というのであった³⁰⁾」

反逆罪、不敬罪で告訴され、紙一重の差でブレイクが死刑になったかもしれないと言われているように、当時の英国王は決して無能、無力なものではなく、常に圧制者だったのである。英国王はディケンズが描くように、存在の意義も必要性もないものではなくて、立派な「暴力組織」の長であり、「階級支配の機関であり、一階級が他の階級を抑圧する機関³¹⁾」の代表者であったのだ。そして、そのような圧制に対する、抑圧されたものの怒りと抵抗をうたったものが、あの“Tyger”の詩なのだとも言いうるのである。

最後にブレイクの「想像力対理性」の問題について簡単にふれて終りたい。

ロマン派詩人全体に共通する「想像力」について知るには、C. M. Bowra の *The Romantic Imagination* が参考になる。特にロマン派詩人がニュートンやロックの機械論的な世界観を嫌う所以がよく分かるように説明されている。つまり、ロックによれば、人間の精神の知覚作用は完全に機械的で受動的であ

って、外部からの印象を「白紙」のような心の上に単に記録するだけの「外界の怠惰な傍観者」とされているからである。このような人間の精神についての消極的かつ機械論的な見方は、なによりも客観よりは主観を重んじるロマン派詩人にとっては、人間の尊厳を損うものとして許しがたかったのだ、とパウラは言うのである³²⁾。

しかし、ブレイクの場合は *imagination* という言葉はあまり用いられていない。後年の *A Vision of the Last Judgment* などには、*imagination* という単語も散見するが、それは大抵は *vision* ないしは *visionary fancy* の言い換えとして用いられているのである。確かにブレイクの場合は「一粒の砂の中に世界を見、野の花の中に天国を見る」云々……という *Auguries of Innocence* の一節に典型的に見られるように、想像力とは *vision* のことなのだ。

ブレイク自身は1799年の Dr. Trustler 宛の手紙で次のように書いている。

「私はこの世が想像力、即ちヴィジョンの世界であることを知っている。……想像力をもつ人間の眼には自然は想像力そのものである。……私にとっては、この世は一つの 継続した 空想または想像力のヴィジョンである。……Homer や Virgil や Milton を芸術の高い地位に置くものは何か？ なぜ聖書が他の書物よりも面白く、ためになるのか？ その理由はそれらの書物が靈的知覚 (Spiritual Sensation) である想像力に、そして間接的に知力や理性に、呼びかけられているからではなからうか？³³⁾」。

Songs of Innocence や *Songs of Experience* などの歌も決して現実の可視の世界を有りのままにうたったものではなくて、すべてブレイクの *vision* ないしは心象風景をうたったものである。「無垢の歌」だけに話を限っても、「雲の上に (天使のような) 少年を見た」り (“Introduction”), 神が出現したりする (“The Little Boy Found”)。また、主人公が眠り、夢の中で *vision* を見る形式の歌もある (“The Chimney Sweeper,” “A Dream”)。“Night” では天使が現われ、ライオンに食われてしまった小羊の魂を天国に迎い入れる。そこでは「ライオンの赤い眼が黄金の涙を流し、小羊のやさしい鳴き声を憐れんで、ライオンが小羊の傍に横たわり眠る」という平和共存ともいべき “a

higher innocence”の状態が描かれている。

S. T. Coleridge によれば最高傑作とされる“The Little Black Boy”では³⁴⁾、日頃、肌の黒いことに悩んでいる黒人の少年は、vision の世界を知った時、「雲ないしは蔭なす木立のような陽焼けした顔や黒い体」から「雲が晴れ、神の声を聞くことができ」て、白人と黒人との差別に耐えることができるようになる。

このようにそこではすべて現実の理性的世界よりは想像力の世界の方が重視され、うたわれているのである。

また、フランス革命時のブレイクの精神が一番高揚した時期に書かれたものに「天国と地獄の結婚」があるが、そこにも天使や悪魔などが登場し、議論をたたかわせるという vision の世界が描かれている。その作品には imagination という言葉はないが、代りに energy という用語が用いられ、それが他の詩人たちの想像力に該当すると思われる。

ここでは Heaven (=Angel) が理性に、Hell (=Devil) が想像力にたとえられ、従来の常識的な見方とは反対に、積極的な想像力(悪魔)の消極的な理性(天使)に対する優越性が説かれている。

「対立がなければ進歩はない。引力と反撥力、理性とエネルギー、愛と憎しみは、人間の存在にとって必要なものである。……

エネルギーが唯一の生命であり、肉体から生じ、理性はエネルギーの限界または外側の周辺である。エネルギーは永遠の喜びである。」

ブレイクの彫版画(Plate 15)では、理性を象徴するマムシは想像力の象徴である鷲によってつばまれてしまう。しかし最後には題名に示されるように、相対立する天使と悪魔は結婚する。すなわち、天使(理性)は悪魔(想像力)の火によって焼かれ、悪魔と合体し詩人ブレイクの友人になる。

つまり「分裂し対立していたものが総合され発展して一つ思想になるということが、ブレイクの考え方の基盤である。」(p. 189)

善と悪とは対立したままの二元論であってはならない。対立は克服され、一段と高められ、総合されなければならない。しかし、対立は消えて失くなって

しまったのではない。総合の中で再び対立が生じ、再び総合されて……と永遠に続く。対立や刺激がないと、人間や社会は活気を失い進歩がなくなる。

このような弁証法的な思考は具体的には「悪とエネルギーが社会を爆発させ、その結果社会を善へと向かわせる。」(p.88)というアナーキイな、しかも予定調和的な革命肯定の思想につらなっていく。

「ブレイクの思想は、社会が人間の自己実現を阻むという悪から出発している。」しかし「人間は、自己実現を達成するために、自由にならなければならない。」(pp.275~6)

ブレイクの基本的な象徴のパターンは、テーゼ(正)——アンチ・テーゼ(反)——ジン・テーゼ(合)としての、the child (innocence)——the father (experience)——christ (a higher innocence) のイメージであると言われるが³⁵⁾、the child の生来の善 (innocence) を阻げる偽善者のような the father の悪 (experience) は、怒りによって焼きつくされ、a higher innocence の状態へと変革されなければならないのだ。

そのためには「経験は今や爆発するほどに、無垢で充たされなければならない。経験の中の無垢を、力強く真正なものにする、このエネルギーが『天国と地獄の結婚』の持つ新しい力なのである。」(p.88)

しかし、社会はいくら作り変えられても、すぐに硬直した拘束的なものになってしまう。だから「作り変えられた社会は、依然として作り変えられるべき社会」であり、「作り変えられた社会は、その社会に新たに対立する社会と総合され高次なものへと発展していかなければならない、再び死のように硬直してしまう。」(p.277)つまり、シジフォスの神話にも似た、しかも楽天的な「永続革命」が人間には必要とされるのである。その思想を説く、ブレイクと一身同体と化したかのようなプロノフスキーの文章もまた美しい。

「統合への歩みはただ一つの革命によって達成されるものではない。……すなわち、いかなる革命も、最後の革命ではないのだ。社会は作り変えられる時のみ生きるといふ、この思想は厳粛ではあるが、生き生きとした思想である。それは創造し、再創造し、常に善への意志に満ちているブレイクのエネル

ギーから生まれた燃えるような思想である。」(p.277)

このように固定化されたものを嫌い、流動性を好むところに、ロマン派詩人としてのブレイクの面目が躍如として感じられよう。しかし、ブルジョア社会をひとたび肯定してしまったディケンズには、勿論、「社会は作り変えられる時にのみ生きる」というような思想はない。

註

- 1) J・プロノフスキー(高饒進訳)「ブレイク革命の時代の予言者一」(紀伊国屋書店) pp.74~75
- 2) このあたりは、かつての同僚であり学兄であった名古屋工業大学宇佐美道雄教授の諸論文の成果によるところが多い。記して謝意を表します。
- 3) プロノフスキー「ブレイク」p.13とp.63, 詳しくは梅津済美「ブレイク研究」(八潮出版社) pp.31~46を見よ。
- 4) *Dickens, Barnaby Rudge* (The Oxford Illustrated Dickens) p.288.
- 5) Angus Wilson, *The World of Charles Dickens* (Penguin Books, 1972) p.152.
- 6) 小池滋訳「バーナビー・ラッジ」(集英社, 1975) pp.492~493, 以下「バーナビー・ラッジ」の引用はすべて小池氏訳による。なお()内の数字は同書のページ数を示す。
- 7) "Authors Preface" (1868) in *Barnaby Rudge*, p.XXIV.
- 8) "Introduction" by Kathleen Tillotson in *Barnaby Rudge* p.VII.
- 9) A. Wilson, *Ibid.*, p.147.
- 10) A. Wilson, *Ibid.*, p.146.
- 11) Philip Hobsbaum, *A Reader's Guide to Charles Dickens* (Thames and Hudson, London, 1972) p.64.
- 12) 中島河太郎「ミステリーとしての『バーナビー・ラッジ』」「バーナビー・ラッジ」(集英社)月報より。
- 13) Edgar Allan Poe, from a review in *Graham's Magazine*, Philip Collins (ed.), *Dickens The Critical Heritage* 所収 pp.105~111.
- 14) Philip Hobsbaum, *Ibid.*, pp.62~66.
- 15) A. Wilson, *Ibid.*, p.150.
- 16) *Ibid.*, p.148.
- 17) *Ibid.*, p.149. ワーズワースの自然児という概念については "The Child is father of the Man" という一行を見てもおよそ理解できよう。また、ワーズワースにはディケンズのように「理性対想像力」の対立はない。*The Prelude* (研究社) Vol.II,

Book XIII の ll. 166~7には, “This love more intellectual cannot be/Without Imagination…….”と書かれているように, 理性は想像力の助けをまって完全なものになる, とワーズワースは考えていたらしい。また Book XI, ll. 123~6 の Reason と logic を区別して註釈者の前川俊一氏は「想像的な直観に裏づけられた最高の “Reason” と, そのような裏づけなしに, 分析的にのみ働く低次の “Reason”」(Notes, p. 181) と記しているように, 最高の Reason とは想像力に裏づけられたものなのである。

- 18) Ibid., p. 150.
- 19) cf. Ibid., p. 148 「多くの ヴィクトリア朝 ロマン主義者と 同じように, ディケンズは バイロン主義とワーズワース主義を糧とし, ついでそれらを捨て去った。」
- 20) アーサー・O・ラヴジョイ (内藤健二訳) 「存在の大いなる連鎖」(晶文社, 1975) p. 211.
- 21) cf. 天野和夫 「法思想史入門」(有斐閣双書, 1972) pp. 44~45 「プラトンは理想的な国家のあり方を提示し, 国家を構成する諸階層, つまり 哲学者の階層, 軍人の階層, そして 庶民の階層が, おのおのその本分を尽くすところに, 正義の要求が充足され, また 国家の理想が実現されると説いた。」
- 22) フランシス・ファーガソン, 福田恒存訳 「コリオレイナス」(新潮社, 1971) 所収 「批評集」 p. 262 より。
- 23) マッシュ・アーノルド (多田英次訳) 「教養と無秩序」(岩波文庫) pp. 120~121 アーノルドは 貴族階級, 中産階級, 労働者階級をそれぞれ野蛮人, 俗物, 大衆と罵倒した後に, 「階級の 観念を超えて, 全社会すなわち 国家の 観念にまで 向上し, そこに我々の 叙知と 権威との 中心を見出そうと 努めたら どうであろうか。」と問うた後に, 表記の結論に到達している。
- 24) 拙稿, 「ディケンズ断片」(「イギリス小説パンフレット 3」, 1972)
- 25) 安藤英治編, 「ウェーバー, プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(有斐閣新書) p. 128.
- 26) A. Wilson, Ibid., p. 152.
- 27) Ibid., p. 287.
- 28) このように 徒弟を昔の 閉鎖的・特権的なギルド集団へと 逆行しようとする 反動的なものとして 漫画的に 批判するのは, 正しい 観点かもしれぬが, 徒弟を批判しておいて, 徒弟を含めた 営業共同体の 指導者である 親方 (鐘屋のゲイブリエル) を批判するどころか, 称揚する ディケンズの 姿勢は, まことに 矛盾していると言わざるをえない。
- 29) プロノフスキー 「ブレイク」 p. 77, 「ウィリアム・ブレイクは 1780年 6月 6日, ニューゲイト監獄を 焼打ちした 群衆の 先頭にいた 1人だった。彼は, 実際は, たまたま 群衆にまき込まれて, 先頭に押し出されたように思われる。」以下の記述は主として

ブロンフスキーの同書による。()内の数字は同書のページ数を示す。

- 30) 梅津済美「ブレイク研究」p. 27
- 31) レーニン「国家と革命」(国民文庫) p. 16
- 32) C・M・パウラ(床尾辰男訳)「ロマン主義と想像力」(みすず書房, 1974) pp. 3~4
- 33) J. Bronowski (ed.), *William Blake* (Penguin Books, 1958) pp. 220~221.
- 34) S. T. Coleridge, "A Man of Genius" in *Critics on Blake* ed. Judith O'Neill (London, George Allen and Unwin Ltd., 1970) p. 14.
- 35) Robert F. Gleckner, "Point of View and Context in Blake's Songs" in *Blake A Collection of Critical Essays* ed. Northrop Frye (Prentice-Hall, Inc., New Jersey, 1966) p. 9.

(なお、本稿は昭和52年度法政大学特別研究助成金による研究の成果であることを付記します。)